

『埼玉退廃メリッサノワール』

保坂 歩

●登場人物

野崎マラク (16)	女装少年
村上メリッサ (14)	無口少女
男 (25)	裏切り者
山本 (28)	組織の連絡員

■草加せんべい屋の軒先

屋外のベンチ。

T『埼玉県草加市』

線の細い甘ロリな格好の少女メリッサが座り、小さな口で煎餅を食べている。

その横、ペットボトルのお茶を飲んで

いるゴシック女装少年のマラク。

メリッサ、煎餅が硬くて噛めないらしく

涙目。

マラク「あーあメリッサ。だから草加せんべ

いは硬いから大変って言ったのに」

申し訳なさそうに顔を下げたメリッサ。

マラク「責めてるわけじゃないよ？ 歯が欠

けないようにゆっくりお食べ」

メリッサ、にこにこ笑顔で何度も頷く。

二人の前に、一台のタクシーが停まる。

降りてくる運転手の青年、山本。

山本「相変わらず目立つね、二人でいると」

嬉しそうなメリッサ、ぺこぺこ何度もお

じぎ。

マラク「お仕事的にはよくないことだね」

山本「理解できているのなら女装は遠慮し

てみたらどうだい、野崎マラク」

マラク「おっと、ルッキズムまるだしだよ山

本さん」

山本「（呆れ）息苦しい世界だよ」

よくわからず笑顔で頷くメリッサ。

マラク「んで？ わざわざ草加まで女装少年

と無口少女を眺めに来たんじゃないよね」

山本、深く頷いて。

山本「裏切り者を始末してほしいんだ」

■同・タクシー内

運転する山本、助手席のマラク。

メリッサは後部座席で、まだせんべいを

一所懸命食べている。

マラク「最近裏切り多くない、この組織？」

山本「不景気だからね。会社勤めでは厳しい

魔道士もいるよ」

マラク「反社のクセによく言う」

山本「子どもに仕事させてるしね」

よくわからず頷いているメリッサ。

マラク「それで生かしてもらってるから文句はないけどー」

山本、無言で写真をマラクに差し出す。

そこには絶命した生首だけの男が。

マラク「ギロチン処刑でもあったの」

山本「裏切り者の仕業だよ。組織のメンバーが追跡していたんだけど、突然連絡が跡絶

えた。後に残っていたのがこの首」

マラク「残忍だねえ。よっぽど恨まれてなき

やここまでしない……」

山本「いやーこれは必要に迫られての殺害だと思う」

マラク「え？」

メリッサも不思議そう。

山本「生き延びる術と、生き残る理由。裏切り者の中では、その二つが一致していたんだ」

マラク「よくわかんないけど……」

マラク、写真を奪い取って。

マラク「そいつが生きてるなら、メリッサが絶対殺せるよ」

メリッサ、よくわからずも頷く。

■ 埼玉レイクタウン・モール内

T 『埼玉県越谷レイクタウン』

テナントの中を歩くマラクとメリッサ。

二人の現実離れた風貌に、何人もの客が振り返る。

マラク「現場は深夜、この辺り。営業時間外とはいえ、目立つ場所でするなあ」

こくこく頷いているメリッサ。

マラク「あの辺で聞いてみようか、メリッサ」  
マラク、ギヤル向けファクションのショップに堂々と入っていく。

続くメリッサ。

客層の中で明らかに浮いているマラクとメリッサは、ギヤル達の注目の的。

人通りが滞っている。

マラクは気にも停めないが、メリッサは申し訳なさそうにぺこぺこお辞儀して歩いている。

ギャル店員「可愛いし……！」

マラク「おねーさん、ちよつと僕とお話しどうですか」

ギャル店員「え……お、男の子……？」

マラク「一応ついてるよ、確認する？」

後ろで驚いているメリッサ。

ギャル店員「い、いいし。あーし事案になっちゃうし」

マラク「そっか、僕は平気なのに。おねーさん、最近こころで怖い事件あったよね」

ギャル店員「ああうん、あった。男のヒトの首だけが落ちてたって」

マラク「ふむふむ」

ギャル店員「そのワリに血が少なかったらしいから、多分本当の現場は別だし」

マラク「おねーさん鋭いね」

ギャル店員「こう見えてミステリ好きだし」

メリッサ、目を輝かせて感心している。

マラク「ちなみにどうして生首だけが置いていかれたのと思う？」

ギャル店員「それは……なんかこう、ほら、儀式的な？ 黒魔術的に捧げるヤツ？」

マラク、にっこり悪魔的に微笑む。

ドキッとするとギャル店員とメリッサ。

マラク「本当に鋭いねおねーさん。思考のベクトルは間違っていないよ。ただ」

ギャル店員「ほえ？」

マラク「首は捧げられたんじゃない。不要だから捨てただけ」

#### ■大相模調節池・湖添いの遊歩道(夕)

何やら考え事をしながら歩くマラク。

何やら照れつつ、その後ろを歩いているメリッサ。

マラク「ふむ……もらった情報以上に、裏切り者とやらは焦ってるみたいだなあ」

メリッサ、おずおずとマラクの袖を掴む。

マラク「ん……？ どうしたの、メリッサ」  
もごもご口が動いているメリッサ。  
マラク「おっと。誰が聞いているからわからないんだよ」

メリッサ、背伸びをしてマラクの耳に顔を寄せて。

その唇がほのかに震える。

マラク「『デートしてるみたい』……？」  
きよとんとするマラク、真っ赤に俯くメリッサ。

マラク「……あはは。一応捜査中なんだから、浮ついた気分じゃダメだよメリッサ？」  
メリッサ、申しわけなさそうに肩を落とす。

が、マラクは逆にメリッサの耳に顔を近づけ。

マラク「全部終わったらデートもハグも、全部してあげる」

メリッサ、喜びと照れで手を振り回す。  
微笑んでいるマラク。

マラク「さて、やろうか——相手は僕達でしか殺せない相手だからね」

■古いアパート・廊下（夜）

くたびれた格好で、姿勢の悪い男がドアの鍵を開けようとしている。

声「お仕事ご苦労さま」  
ハッと見る男。

そこには軽薄そうに手を振るマラクと、ペコペコお辞儀をするメリッサの姿。

男「だ……誰だ……？」  
マラク「再就職も大変でしょ？ 埼玉も家賃上がってるし、物価もどんどん高騰してるもんね」

にじり寄っていくマラク、怯む男。

男「お前ら……まさか……」

マラク「ごめいさつ。組織の人事担当だよ」  
ピースしているメリッサ。

男「（脅え）う……どうしてここが……」  
マラク「一度に殺しすぎたね。首だけの死体。」

首から下の死体が見つからない事件。これだけ多発したら、いくらなんでも、足がつくよ」

男「……」

マラク「犠牲者の――死んでいるはずの人間の、指紋が、この周辺で多く見つかったている。それに、こういう技術もあるんだよ」

マラク、スマホを取り出し監視カメラの画像を見せる。

何やら、男をトラッキングしているらしいエフェクト。

マラク「監視カメラのボディ・トラッキング画像だよ。死んだ男性とまったく同じ体格、全く同じ歩調――誤魔化せなかったね？」

マラク、男の首筋を指差す。

そこには男の首から上、首から下をまるで無理矢理繋げたかのような分け目がない。

マラク「貴方は生首を切断したかったんじゃない。首から下が欲しかったんだ。新しい生活を送るための、自分の体が――

脅えていた男だが、その目に強い抵抗の色が灯る。

マラク「必要だもんね、他人の人生。元の体の情報は、組織に残りまくりだし」

男「そこまで、知っていたのだな……俺達の

……『一族』の目的を」  
マラク「わかりやすいよ、『ペナンガラン』の末裔さん」

イメージ。

胃袋と内臓をぶら下げて空を飛び回る女の生首。

T『ペナンガラン マレー半島に伝わる吸血鬼の一種 首と内臓だけで夜空を飛び 人間を襲うとされる』

マラク「日本に帰化して組織に入っていたとは知らなかったけれどね……どんな理由があっても裏切りはタブーだよ」  
強く頷いているメリッサ。

マラク「他人を殺して、その体で個人情報を詐称することもね」

男「わかるまい、お前のようなこどもには：人間の体を奪ってでも、生きたいと願う俺達の心を」

次第に怒りが強くなっていく男の顔。

その首が、体から離れ出す。

ずるりと出てくる男の内臓。

メリッサ、脅えてマラクの背後に隠れる。

マラク「こどもなら手加減してくれるの？」

首だけで浮遊する男、マラクを睨み。

男「追っ手ならば容赦はしない！」

男、大きく口を開けマラクに突っ込む。

微動だにしないマラク、その腕に食らい

つく男。

ガキン、と金属を噛んだような音。

男「こ」

服の袖が破れ、露わになるマラクの腕。

生身の肌ではなく、球体関節と硬質なプ

ラスチックのような素材。

男「じ…：自動人形か…：！」

マラク「（微笑み）気づくの遅いよ」

思いきり腕を振り上げるマラク、男は高

速でアパートの外まで吹っ飛ばされる。

#### ■同・駐車場（夜）

勢いよく落ちてくる男、地面に激突。

男「（苦しそう）が…：！」

そこにマラクが、メリッサをお姫様抱っ

こした状態でずとんと着地。

マラク「しぶといね。こっちも手は抜かない」

メリッサは顔を覆って照れている。

男「に、逃げてみせる…：一族のためにも…

…：！」

男、内臓を触手のように伸ばしてくる。

巻きつかれるマラクとメリッサ。

メリッサは慌てているが、マラクは動じ

ない。

マラク「フェティッシュだなあ、内臓で少女

と人形を縛るなんて」



腰に手をあて、自慢気なメリッサ。  
× × ×  
マラク「ま、人形である僕には無意味なんだ  
けど……バディには最適な関係だろ？」  
白目を剥き、無言の男の死体。  
マラク「やれやれ。勝ち名乗りもあげられな  
いんだよな、メリッサが殺すと」  
メリッサ、てへぺろ。

■タクシー内（翌朝）

運転席の山本、助手席のマラク。  
後部座席でソフト煎餅を食べているメリ  
ッサ。

山本「相変わらず早い仕事だ。幹部も誉めて  
いたよ」

マラク「そりやどーも。アフターケアまでは  
できないけどね」

山本にスマホを見せるマラク。

そこにはアパートの部屋で脅える、首だ  
けの女性達。

山本「……新しい体を没収された彼女達に、  
生きる術はない。しかるべき処置が待って  
いるよ」

マラク「残酷だね。あの男も、仲間と家族の  
ために殺人までして、新しい人生を生きよ  
うとしたっていうのに」

山本「裏切りは裏切りだ。身内のためであれ  
ば、組織に背を向けていいという道理はな  
い」

マラク「ふふ、どーでもいいよ。僕は人形、  
メリッサはマンドレイク……まとな人生な  
んて期待してない」

山本「……」  
マラク「使ってくれる相手がいることは、幸  
いさ」

山本「……賢いことだ。この魔術都市埼玉県  
で生きていくためには、それが正しい」  
マラク「（外を見て）ここでいいよ。少し歩  
こう、メリッサ」

怪訝そうなメリッサ。

マラク「約束のお散歩デートだ」  
メリッサのぱっと明るい笑顔。

■街道

N「ここは異界との境界が薄れ、超常の存在が溢れかえった埼玉県」

綺麗に舗装された奥の細道を、二人並んで歩くマラクとメリッサ。

N「魔術犯罪組織がいくつも結成されたこの街では、禁断の技術から生まれた多くの子ども達が日々を生きていた」

あどけないその様子は、まるで御伽話のヘンゼルとグレーテル。

N「村上メリッサと野崎マラクは、そんな子ども達の中でもS級の力を持つとされる暗殺者である」

タクシーの中からそれを眺めている山本、複雑そう。

山本「正しいから幸せ、というわけでもないが……せめてもう少し、埼玉が平和であることを祈るよ」

朝日に向かって、タクシーが去っていく。

了